

## 現代日本の不倫の分析

——ライフイベント，セックスの意味，アイデンティティ——

### Analyses of extramarital affairs in contemporary Japan

——Lifeevent, meaning of sex, identity——

博士後期課程 臨床人間学専攻 2014年度入学

パ ッ ハ ー ア リ ス

PACHER Alice

#### 【論文要旨】

本稿の目的は婚外恋愛（不倫）をしている男女が，どのように夫婦間と夫婦外の性を定め，性を認識しているかを明らかにすることにある。そこで，2010年から2017年の間の夫婦と夫婦以外の性がどう描かれているのかを先行研究から明らかにし，合わせてインタビューから得られた結果を論じる。先行研究とインタビュー調査の両者から，夫婦と夫婦外の性意識・性行動を見ると，「性」は家庭と恋愛で二つの領域に分けられるため，それらの性意識・性行動が異なる。夫婦の場合，互いの性的な満足や快樂よりも，夫婦としての役割を果たせば「十分」と評価され，（セックスレスになりやすい傾向がみられるが），夫婦間で得られない身体的な触れ合いや，性的な快樂は夫婦外で満たす傾向が見られる。特に，インタビュー調査では，「結婚」というライフイベントにより，子作りのプレッシャーが大きいことや，出産後，夫婦関係よりも子育てに集中することによって，もともと持っている自己の性意識・性行動を生かすことが困難である。自己のセクシャリティの自覚が薄いため，十分に内面化されておらず，二人だけの性生活を作り上げることは家庭内で困難であると考えられる一方，婚外セックスは自己が好む性を見つけ，性欲を満たすことができる手段となっている。

【キーワード】 婚外セックスと性意識・性行動，不倫，日本の男女関係，セックスの意味，自己のセックスと内面化

## 1. はじめに

日本における「婚外恋愛」（不倫）については、アカデミックな議論の対象とされるよりも、マスメディアにより広く報道されている。現代日本社会では、著名なタレントやアナウンサーの不倫が大きくマスメディアで報道され、芸能界では不倫が発覚するとバッシングを受け、批判を浴びるケースが多く見られる。加えて、夫婦外の異性との付き合いをしている男女のインターネットブログでも、不倫の経験談の書き込みに対して許容する意見がある一方、批判的なコメントがなされることも少なくはない。

その反面、中高年セクシャリティ調査（荒木：2014）<sup>1</sup>によれば、2000年から2012年の間、夫婦間の性的規範が薄くなる中、既婚者同士の不倫（婚外恋愛、ダブル不倫とも呼ぶ）に対する受容度が高まり、特に、調査対象である40代から70代で配偶者がいるにもかかわらず、異性と付き合いの男女が増加していることが言われている。また、現代日本社会では不倫を「大人の恋愛」や、「婚外恋愛」、「本気の不倫」と呼ぶようになり、テレビドラマや、本、雑誌などでもポジティブに取り上げる傾向が見られ、不倫に対する2つの価値観が存在する<sup>2</sup>。

現代日本社会において、夫婦間のセックスレスが進む中、婚姻関係以外の異性との付き合いはどのような意味を持っているのか。本稿では、不倫をしている男女に関して考察した。本稿の分析結果は日本人全てが不倫をしていることを示すわけではない。ただし、日本人の不倫に対する許容度が増していることは明らかであり、このような現象から目をそらすことはできない。

本稿では、先行研究のレビューを行った上で著者が行ったインタビュー調査をまとめ、婚外恋愛についての背景を分析し、夫婦間と夫婦外の性意識・性行動の相違点を考察することを目的とする。不倫に関する先行研究は少ない中、亀山（2003：2006：2010：2011：2013：2016）が男女の不倫における実態を最も多く取り上げているため、本稿では主に亀山の先行研究を取り上げる。

## 2. 夫婦関係以外のパートナーの実態調査

中高年セクシュアリティ調査（堀口：2012）、2000年、2003年、2012年と3度にわたって40代から70代の男女における性意識・性行動に関するアンケート調査を行っている。そこで、2000年から2012年の間に、配偶者とのセックスが「この一年全くない」が40代から70代の男女の間で増えていることが目立つ。特に、50代の男性では、16%（2000年）から53%（2012年）に増加し、50代の女性では、23%（2000年）から53%（2012年）まで増加している。このように夫婦間のセ

---

<sup>1</sup> 荒木「配偶者間のセックスレス化～2012年調査で際立った特徴～」日本性科学会雑誌『2012年・中高年セクシュアリティ調査特集号』第32巻増刊号12, 7-21, 2014.

<sup>2</sup> 2000年に入ると、夫婦間の性生活をよりよくするための本よりも、『不倫の恋も恋は恋』（2004）、『不倫の幸福論』、『できる男は不倫をする』（2015年）、『不倫の教科書』、『婚外恋愛のコツ』（2012）などのような本が多く出版されていることは興味深い。

ックスレス化が進んでいる中で、婚姻関係以外の異性との付き合いにおける意識が変化していることが目立つ。同調査による、「配偶者以外の異性と親密な付き合いをすることについて」に関しても「付き合うべきではない」と考える男性は45%（2000年）から28%（2012年）、女性は55%（2000年）から49%（2012年）と減少している。

加えて、婚姻関係以外で異性との「性的関係があっても家庭に迷惑がかからなければいい」と回答した男性は17%から33%、女性は6%から14%まで増えている。

以上のような結果から、2000年から2012年の間に少なくとも、配偶者以外の異性と付き合うべきではないという意識が男女ともに低下傾向にあり、婚姻関係における性規範が既婚者に大きく変化していることが見てとれる。

2000年以降は、既婚男性と（若い）未婚女性との婚外恋愛よりも、既婚者同士の不倫がメディアで取り上げられている（例えば、2017年のTBSドラマ、「あなたのことはそれほど」）。また「不倫」という単語に加えて「婚外恋愛」<sup>3</sup>、または「ダブル不倫」と使うようになり、「不倫」という単語における道徳的なマイナスイメージがより緩くなってきている。現代の既婚者同士の婚外恋愛の特徴として、「互いの家庭のことも相談できる恋人」であり、互いに「共感」できることがあげられる。

加えて、2015年から「セカンド・パートナー」という現象が注目されるようになった。「セカンド・パートナー」とは、肉体関係ではなく、精神的な繋がり、つまり、プラトニックラブの関係が中心となる関係性を示す。互いのパートナーには家庭を持っているが、家庭外で恋愛したいという場合にセカンド・パートナーを作る。このような現象は主に40歳代に見られる傾向である（秋山：2017）。

現在、不倫の増加をもたらす要因として、「夫婦間での性の位置づけの希薄化」（荒木 2014：18）や、出会い系サイトのようなメディアの発達（亀山 2014：95）により、異性と出会うのがより簡単になったということが議論されている。「性的規範が希薄になった」とは次のようなことである。従来では性生活は夫婦を結ぶ大切な絆だと考えられていた。例えば、1960年代から1980年代までの間はお見合い結婚が多く、恋愛結婚が少ない時代であった。異性と出会う場所も限られ、例えば、職場が提供するお見合いで結婚相手を見つけることなどが多かった。結婚するまで交際する人数も少なく、「セックスはあくまで結婚を前提としたもの」であった。しかし、1980年代から自由恋愛が進み、結婚前の性的な経験が増える中、（山田 2008：41-50）「夫婦間の性生活を重要と考えない人」も増えたと言える（荒木 2014：18）。

さらに、メディアの発達によって、SNS や出会い系サイトで異性と知り合うことがより簡単に

---

<sup>3</sup>「婚外恋愛」の定義には性風俗産業は含まれないが、「婚外セックス」の定義には性風俗産業は含まれる。男性の場合、外で「恋愛みたいなことになると、今の生活が乱される。それを避けたい」ため、性風俗を利用する人もいれば、性風俗よりも「普通の女性と出会う」ことと家庭で得られない「新鮮な恋愛」を求め、「夫」という役割を捨てて「男」を発揮したいという人も存在する（亀山 2003：16-21）。

なり、こうしたメディアを利用して異性と婚外恋愛に至るケースもある。加えて、特に40代女性の不倫が増えている理由として、子育ての後（子供が成長したら）、妻は自分のための時間ができ、将来をどのように生きるべきなのかについて考える余裕ができる。そこで、パートを始め、婚外相手を見つけるケースもある。また、出会い系サイトを利用して、夫以外の相手と出会ったり、過去の恋人の名前をインターネットで検索し、相手に直接メールし、再開するという事例も見られる。

このようなデータを用いて、婚姻関係以外の異性と性的な関係（不倫、婚外恋愛）を持っている男女は、結婚内の性に対してどのような意味を持っているのか明確に考察するため、以下に先行研究と自身が行ったインタビュー調査を分析し、婚外恋愛と夫婦間の性の規範と意味を明らかにする。

### 3. セックスの意味とアイデンティティ

本章では、婚外セックスにおける先行研究について述べる前に、性意識・性行動に関して西欧で行われているもっとも大きな二つの理論を紹介する。

一つ目は、John H. Gagnon and William Simon (2005; orig. 1973) の議論である。彼らによると、人間の性的欲求は生物学的な由来よりも社会や文化により構築されるものであるとしている (Gagnon 2005 : 16)。換言すれば、「性行動を含むすべての社会的行動は、社会的に筋書きされている」。また、性的規範は、社会によってだけでなく、社会の中での各制度によって筋書き [script] や行動枠 [frame] が作り上げられる。筋書き [script] というのは、人はどこでどのように行動するべきか、ということである。筋書きは文化的に異なり、ジェンダーのステレオタイプや、行動期待が反映される。行動枠 [frame] (Gregory Bateson<sup>4</sup>) というのは、行動パターン、ある状況でどのように行動するべきかを教えてくれる。いつ、どこで、何をするのかを決める。二つ目は、時代の変遷によりセクシャリティの意味が異なるという議論である。現代は、人間はそれぞれ自己のセクシャリティを持ち（セックスの意味や、ファンタジー、好み、速さ、セックスの頻度など）、それがパーソナリティ（アイデンティティ）の中心的要素であることが「事実」として捉えられている (Eder: 2002, Lewandowski: 2008) という議論である。つまり、セクシュアリティは人間のアイデンティティの大きな部分である (Eder 2015 : 12)。人それぞれ自己の性意識・性行動もち<sup>5</sup>、それに対して反映することが重要となる。自己のセクシュアリティを反映するだけでなく、自分が持っている性意識（主に性的快楽）を男女関係でどのように発揮するのかも重要である。互いのセクシャリティを発見する中で作り上げ (Eder 2015 : 12)、男女関係の中での性的な成長が重要となっている (Sydow 2015 : 1)。以上のことから、セクシャリティというのは人間の行動の中で、普遍的な意味を持っているのではなく、制度化の中でそれぞれの意味が生まれて

<sup>4</sup> もともと Gregory Bateson (1985; orig. 1955) からの由来する「行動枠」の理論であるが、Erving Goffman (1977) がその理論をより詳細に発展させた (Lenz: 2003)。

<sup>5</sup> 本論文では自己の性意識・性行動を「自己のセクシャリティ」と呼ぶ。

くる。

日本では日本の文化や、社会の影響において、完全に西欧の思想を受け入れることは困難であり、受け入れる必要はないが、人間はそれぞれ自己のセクシャリティを持ち、重要なパーソナリティの部分であると筆者は考える。そのため、以上述べた思想を踏まえて夫婦間と夫婦外の性意識・性行動の相違点を明確にしたい。加えて、不倫を経験する男女はどのような自己のセクシャリティを持っているのか、日本ではどのような性規範と性的な意味が内包されているのかを分析する。

#### 4. 夫婦間と夫婦外の性意識・性行動—先行研究から

本章では、性規範は個人の行動にどのように内在化しているのかを考察する。本稿では主に2010年から2017年までの不倫（婚外恋愛）を取り上げるが、本章では、2003年以降に発表された先行研究も取り上げる。

##### 4.1 男性の性意識・性行動—妻とのセックス

ここではまず夫が妻とセックスをどのように語っているのかを述べ、本章では主に亀山（2003）の先行研究を取り上げる。婚外恋愛に至るケースの中で、男性は妻とのセックスに関して「飽き」を感じ、興奮することができないという事例が多く見られる。「セックスって飽きるんですよ。しかも家に帰ればいつでもできると思うと、興奮度は落ちますよね。だからなんとなく外で興奮する場を持ちたいという気持ちがあるんじゃないかと思うんです」（亀山 2003：17）とある男性は述べている。また、外で性的な興奮を得ることによって、自分はまだ「男」であることを強く認識できると述べている。

さらに、妻とはセックスができない、またはセックスが楽しめない理由として、妻は「女」よりも「母親としては完璧」であるため、「女として見るのはもう無理」と言われている。そのため妻に対して「エロスを感じるのは難しい」。そこで、不倫を経験する男性の「妻」とのセックスでは、エロスを排除し、「セックスはオーソドックス」、「あっさりしたセックス」、「スポーツのような感覚」という特徴が見られる。つまり、「興奮よりも安心感」が中心である。加えて、妻とのセックスは、「義務」や、「礼儀」であると語る男性もいれば、妻とのセックスを完全に排除する人も存在する。ある男性は次のように述べる。「家庭に戻ってもレス。妻も求めてはきませんしね。たまに体の奥から『したい』という気持ちがわき起こってくることもある。でも、今さら妻を誘うこともできない」。自分の性欲を満たしたいという気持ちになると、妻とではなく、「一人でしますけど、どうせなら女性の温かさに包まれたい。それは妻を好きじゃないというわけじゃない」（亀山 2003：12-16）。他の男性は、妻から一年間セックスを避けられ、「妻がしたくないなら別にいい」と思う時もある一方、セックスで「身も心もほっとする」、「人間にとっては必要なんじゃないか」と考えることもある。しかし、このケースでは、妻と性生活を復活するよりも、妻以外の既婚者女性と性的な関係を持つこととなる（亀山 2013：80-81）。

亀山の取材の中では、できちゃった婚を経験する男女の中で、結婚相手のことが好きだから結婚を選択したわけではなく、「結婚」自体が目的であったと述べられている。そのため、男性は「日常と非日常はあくまでも分けたい」ため、「妻には自分が好きなセックスをさせたくない」<sup>6</sup>、「してもらいたくない」と語る。この男性は、妻が求める時にしかセックスをしないと言う。他に、妻とのセックスは今まで子供づくりが中心だったため、子供が生まれた後にも「妻とのセックスは生殖行為の延長線上」であり、もう妻とは性的な快楽を感じないと言う事例も見られる。

#### 4.2 男性の性意識・性行動-妻以外の異性とのセックス

一方、不倫相手とのセックスは性的な快楽が中心であり、男性は相手とのセックスで「もっと様々なことを試したい」、「相手を興奮させたい」、「女性に包み込まれるような幸福感というのか、あんな気持ちは初めて」ということを述べている。婚外セックスの場合、夫婦のセックスよりも長い前戯や、単純にセックスそのものを楽しむ傾向が見られる。相手との性的な関係を持てば持つほど「彼女の性感が面白いように高まって行くことに、興奮した」とある男性は述べる。このような体験をすることによって、男性は「性欲があることを再確認」し、「嬉しいほど男を感じる」ことができる（亀山 2003 : 2011）。

以上のような語りを見ると、まず「妻を女として見られない」傾向が見られる。結婚をしてから、自分のパートナーは「女」ではなく、「妻」となる。妻として見ているということは「女」としての意識を排除している。そのため、エロスを感じなくなり、相手に男性が好むセックスをさせたくない。

また、自分の妻に理想的な母親像を反映させ、一人の女性・性的なアイデンティティを持っているパートナーとしては認識せずに、「妻とはできないセックス」を不倫相手と行う。

#### 4.3 女性の性意識・性行動-夫とのセックス

女性の場合、夫は妻を一人の女としてではなく、「妻」や、「母親」と認識しているため夫からセックスを避けられていると言う事例が多く取り上げられる。ある女性は夫とのセックスを次のように語る。「夫は自分の欲求がある時だけ、私のベットに潜り込んでくる。それで私のパジャマの下だけ脱がせて、自分の下半身だけ出して、前戯なんかほとんどしないで挿入してくる」。さらに、「早く終わればいいとだけ思うようになった」(…)「自分の要求も枯れていった」(亀山 2010 : 38)。

女性は、母としての生き方が「ときどき疲れる」(亀山 2000 : 17)。「だからと言って全て逃げ出したいというわけではない」。家族は何よりも大事だが、「それだけだと、たまに『私ってなんだ

---

<sup>6</sup> 本章のケースでは自己のセクシャリティや、互いのセクシャリティを作り上げることよりも、家庭を作る方が結婚の目的の中心であるため、セックスと家庭を分けて考えられていると言える。

ろう』と思う」。女性は婚外恋愛を通じて女として大事な存在であることを認識したいのである。婚外恋愛の相手とは性的な行為だけではなく、恋人関係を楽しむ傾向が見られる。ある女性は、夫とは15年セックスレスであり、「人肌が恋しくて、夫のそばに行ったら、お前は子供のことを心配するより先に、自分の快樂が欲しいのかと夫に言われ、ショックで次回夫から誘いがあったても『ごめんなさい』と断った」と言う（亀山 2010 : 33）。

また、婚外恋愛を経験する女性の中には、夫のセックスの「やり方」に不満を抱いている人が多い。夫との「セックスはあっさり」していて、「(夫) はあまりセックスが好きではない」、夫はセックスにそれほど手間をかけない、彼から求めてきてささっと終わって背中向けて寝る。夫とのセックスの以前に、「夫とはキスなんて何年もしていない」と述べている女性もいる。

さらに、不倫を経験する女性の中で、妊娠後にセックスをしなくなって、欲求不満を感じるという事例も多く見られる。ある女性は、妊娠している際に性欲が高まり、夫とのセックスを求めていたが、「夫とは妊娠していると怖がって、あまりしようとしな」と語る。彼女は欲求不満を感じた。出産後も夫はセックスを拒否したので、女性の夫への愛情は低下し、夫以外の異性と性的な関係を持つようになった。妊娠している間に肉体的な快樂を求めながら夫に拒否される場合もある一方、妊娠、出産を経て、互いに男女よりも、母親・父親意識を優先させて、日常生活の中からセックスを排除するケースが多い。

そもそも、夫以外の異性との関係を持つ女性の事例では、「気に入った男性と結婚がしたい」というよりも、結婚そのものに憧れ、結婚願望が強かったため、夫とは「なんとなく付き合っ、なんとなく結婚してしまった」と語る人も存在する。他に、「私たちはできちゃった結婚」、「できちゃったから」と語る女性が少なくない（亀山 2000 : 74）。このようなケースでも、気に入った男性、つまりその夫と結婚したいと言うよりも、結婚前の妊娠をきっかけとして結婚に進むケースが見られる。このような場合、夫のことは「家族としては好き」「友達のような関係である」「家族は家族で大事」だが「家庭と恋愛」は別という意識が見られる（亀山 2010 : 2014）。

亀山（2004）は、女性の不倫について次のように語る。「女性は結婚すると夢中で「妻」になろうと努力する、そして、子供ができれば今度は「母」としての時間を懸命に生きる。その役割に全力投球すればするほど、あとの反動も大きいのではないだろうか。そのとき、誰かと知り合う。夫とは「家族」ではあっても、もはや、ときめき合う相手ではないとわかっている、だが、知り合った男性は、自分をまるごと「女」として扱ってくれる。心の底で疼いていた、女としての意識が目覚めます」（亀山 2004 : 19）。

#### 4.4 女性の性意識・性行動—夫以外のセックス

一方、不倫相手とのセックスはどのように語られているのか。不倫相手とのセックスでは、夫とのセックスよりも愛撫が長く、身体的なふれあいやキスを楽しむ傾向が見られる。「キス一つでこんなに身体の感覚が麻痺するものか、と驚いた」（亀山 2010 : 46）。以前にはこのような性的な快

楽を夫とは経験しなかったため、「自分があんなにセックスに夢中になれるとは思ってなかった」、  
「初めて感じることの素晴らしさを知った」（亀山 2013：19），とある女性は語り，婚外恋愛を経験することは，自己の性的な快楽を発見する機会にもなっている。婚外セックスを経験していなかったら，このような性的な快楽を経験できず，セックスは「そんなものなんだろう」と終わっていたらとこの女性は考えている。そのため，夫とのセックス，または夫が望むセックスを拒否するのにも関わらず，不倫相手とのセックスは楽しめる。「オーラル・セックスがもともと好きではないのに，彼とは抵抗がなかった」（亀山 2010：39），「彼はものすごく情熱的。夫とはろくに感じたこともなかったんだけど，彼とはすごく感じる」（亀山 2010：24）。加えて，夫が与えてくれない肉体的な快楽を与えられるため，（亀山 2010：108）夫以外の相手をより好きになると女性たちは語る。

加えて，婚外恋愛を経験してから「以前よりも不満じゃない」と語る女性も存在する（亀山 2016：34）。彼女は夫婦間のセックスに不満を感じていたが，婚外恋愛をしてから，セックスが楽しくなり，前よりも不満ではないと述べている。婚外恋愛と家庭を分けて見ており，「夫とは家庭をうまくやってればいい」のであり，「女」としては外で満たせるのである。また，家庭内で夫とのセックスを好まなくても，「夫婦の義務としてしなくちゃいけない」と述べる女性も存在する。

本章では，結婚相手とのセックスと結婚相手以外とのセックスの語りについて様々な事例を見てきた。特に興味深いのは，夫婦間では「やりたくないこと」，「相手にさせたくないこと」が婚外恋愛では興奮度が高まるために行われることである。例えば，妻・夫とは口で愛撫はしない。特に女性の場合，夫を口で愛撫をすることを義務で行うケースも見られる。オーラル・セックス [Cunnilingus] は相手と自分に性的快楽を生み出す手法である（Gagnon 2005：66）とされるが，オーラル・セックスを婚内のセックスで避けるのは，その行為に対して穢らわしいと感じるからか，またはエロチックな意味を持つため「結婚生活」にはふさわしくないと考えられるからである（亀山 2003：46-47）。オーラル・セックスは婚外セックスでは好んでされまし，セックスの最中にキスをする事，様々な体位を試す事，前戯の時間が既婚者とのセックスよりも長く，丁寧に愛撫することも，結婚相手以外とのセックスが快楽中心の意味を持っていることがわかる。

以上，先行研究に基づいて，夫婦間と夫婦外のセックスについてどう語っているのかをまとめ，二つの領域で性意識・性行動が異なることを見いだした。男性の場合，夫婦間では妻に対して性的に興奮できず，エロスを排除している傾向が見られる。妻とのセックスを完全に排除する人もいれば，義務意識でセックスを行う人もいる。一方，夫婦外のセックスではエロスを味わい，性的快楽が中心である。婚外セックスでは，自分の性欲を満たすことと，相手の性欲を満たしたいと言う願望が強いことが見られる。女性の場合，家庭では「妻」や「母」としての役割意識が強いため，夫とのセックスを完全に排除するか，または義務のような感覚で行う事例が見られる。また，夫とのセックス自体に不満を感じるため，女性の中ではそもそも性欲がないと考える人も存在する。一方，婚外セックスをすることによって，女性は性に対して主体的になる傾向がある。例えば，夫の



性欲処理のためにセックスをするのではなく、女性側も性的な快感を感じたい、夫とのセックスではオーガズムを感じたことがないため、一度でもオーガズムを感じたいと言う女性の語りが目立つ。そのため、男性から誘われて婚外恋愛に至るケースだけではなく、女性が例えば、出会い系サイトを利用して、積極的に既婚者以外の異性と出会うきっかけを作っていることが興味深い（亀山 2010 : 2011 : 2013）。

亀山は男女の婚外セックスの事例をかなり詳細に分析している。しかし、夫婦間の性意識・性行動がどのようなきっかけで、どのように変化するのかと、その変化によりどのように婚外セックスに至るのかはまだ十分に明確にされていない。例えば、亀山は次のようなケースを挙げる。夫は妻のことを女性ではなく、妻、または母親として見る意識が強いため、妻以外の女性と性的な関係を持つと言う。または、他のケースでは、妻は夫のセックスに不満があるため、夫とできないセックスを夫以外の男性に求め、快感を満ちます。両方のケースは異なるが、両方とも婚外セックスに至る要因である。しかし、このような事例を見ても、それぞれの男女はもともとどのような性意識を持っているのか、漠然と抱えている自分のセクシャリティについてどのように考えているのかが亀山の先行研究では明確になっていない。

自分がもともとどのような性意識を持ち、どのようなプロセスで自分の性が発揮できなくなると、どのように婚外セックスに至るのかを知るため、著者はインタビュー調査を行った。以下、インタビュー調査の結果を紹介する上で、インフォーマントの中から男性 2 人と女性 1 人を詳細に紹介する。その 3 人は 4 ヶ月から 4 年の期間において 2 回にわたりインタビューを行ったため、夫婦間の性意識・性行動が時間を経てどのように変化するのがよりもっと明らかになった。

## 5. インタビュー調査

### 調査概要

調査時期は2012年8月から2013年7月と、2017年4月から8月までである。調査対象は20代から40代の未婚・既婚者の男女42人であり、自身の性意識・性行動において広く聞き取りを行った。インタビューは日本人の性意識・性行動を全般的に聞き取ったが、本稿ではその中の一部、つまり、20代から40代インフォーマント<sup>7</sup>の不倫における語りのみを紹介する。さらに、2017年に実施したインタビュー調査から3人（男性2人と女性1人）の語りをより深く紹介する。サンプリング方法は、友人への依頼であり、そこからさらにインフォーマントを紹介してもらった。

### 調査方法

半構造化インタビュー調査を行い、インフォーマントにできるだけ自由に語ってもらった。イン

---

<sup>7</sup> 本章で紹介するインフォーマントは次のように示す。F30.x=30代の女性と、F40.x=40代の女性を意味する。M30.x=30代の男性と、M40.x=40代の男性を意味する。

タビュー時間は1時間から1時間半で行い、インタビューはインフォーマントの望む場所で行われた。場所として多く選ばれたのは、喫茶店やレストラン、インフォーマントの仕事場であった。

### 質問項目

- (1) 属性：年齢，仕事の有無，労働時間，余暇の時間，家族構成など。
- (2) 自己のセックス観：セックスの意味，関心や重要性，性教育の有無，避妊など。
- (3) 性生活の状況：パートナーとセックスをする・しない理由，セックスの頻度，セックスの満足度，セックスに関する会話など。
- (4) パートナーとの関係性：一緒に過ごす時間，「男女」でいられる時間の有無，家事分担，パートナーとの関係性の満足度など。
- (5) セックスレスである場合，その状況：セックスレスになってからの期間ときっかけ，生活の変化の有無，日常生活の身体的な触れ合いの有無，セックスレスであることの満足度など。
- (6) 出産を経験している場合，その状況：立ち合い出産の有無，会陰切開の有無，産後の全体的な体調など。
- (7) 婚外恋愛（不倫）の経験の有無：婚外恋愛に至るプロセス，結婚以外の異性とはどのような付き合いなのか，相手と会う頻度，不倫に対する意識，相手とのセックスの状況など。
- (8) 男性の場合：性風俗産業の利用経験の有無，性風俗に通うきっかけ，夫婦関係で得られないが，性風俗産業では得られるもの，など。

### 5.1 インタビュー結果

性意識・性行動におけるインタビュー調査では、インフォーマントは婚姻関係以外の異性との性的な関係についてどう考えているのかを語ってもらった。不倫についてただ一言（例えば、「不倫はよくない」(F20.02)，「不倫する人はチャライ」(M20.05)，「不倫はあり得る」(M40.01)）と話した人もいれば、多く語った人もいた (F40.03)，(F30.06)，(F30.09)，(M30.07)。また、不倫というテーマ自体に興味がないと言う人 (M30.03)<sup>8</sup> もいれば、そもそも性的な関心が低く、関係性の中でセックス自体を拒否するインフォーマントも存在した (F30.01)，(F30.04)。

一方、「不倫（婚外恋愛）は良くないと分かっているけれど、あり得る (F20.01)，(F20.09)，(M20.01)，(M20.02)，(M30.2)，(M30.04) や、「互いの家庭に問題が生じなければ構わない」(M30.01)，(M30.06)，(F30.06) と考えているインフォーマントは少なくない。例えば、(M30.04) は、現在一度離婚を経験したが、結婚する前に既婚者の女性と性的な関係を持ったこともあれば、彼自身が結婚していた時にも、妻以外の異性と性的な関係を持った経験がある<sup>9</sup>。彼は

---

<sup>8</sup> しかし、彼は以前、彼女と付き合いながら、他の既婚者女性と性的な関係を持ったことがあると語った。

<sup>9</sup> 彼は、過去の妻とはずっとセックスレスであったと語る。理由として「疲労」、「マンネリ」と、「相手に性的魅力を感じない（そのため欲求の低下）」である。

「頭では良くない」と考えている。「自分の家族だったらやっぱり悲しむ」。(F20.09)は、夫が浮気したら「それは仕方がない。他の人には目が行くだろうな」。自分も相手も結婚相手以外の異性と性的な関係を持つのは「好きになっただろうがない」(F20.01)と言う女性も存在した。

ここで、婚外セックスを経験した女性の事例 (F20.09) を提示する。彼女は25歳で未婚だが、現在彼氏がいる。彼女は、彼氏・夫がいても、他の異性と性的な関係を持っても構わないと言う。不倫に対する許容度は高いが、この最初のインタビュー当時には、不倫はしたことがないと彼女は語る。現在の彼氏とは定期的に性生活はあるが、彼氏の「ペニスが太すぎて痛い」と語る。そのため、他の男性と一度でもいいからセックスをして見たいと述べている。また、今後「結婚してから後悔しないために (セックスを) したい人とはしたい」と述べていた。

インタビューしてから2ヶ月後 (2017年7月) にもう一度彼女と話した。その時、婚約が決まったという。そして婚約が決まってから、彼氏とは別の、性的な関係を持ちたいと考えていた男性と仕事後にご飯を食べに行き、3回性的な関係を持ったと述べた。その相手とは職場が一緒に、彼は未婚者である。その人とのセックスについて「一緒にバスケするような感覚」で趣味を共有するみたいなのであると言った。セックスが終わったら「はい、お疲れ」といった感じであると語る。彼氏が同じことをしたらどうするのかと聞くと「彼がそういうことしたらダメ、許さない」と言った。

また、性風俗産業の利用については、それは心よりもお金との関係であるとして、不倫ではないと述べている男性がいる (M30.04), (M30.06)。加えて、「もしお金があれば利用したい」(M20.01), (M20.06), (M20.08), (M30.05), (M30.04) と述べる男性も存在した。「お金を媒介としたサービスであって、そんな生々しいものではない。でもそこに行ったら彼女が怒るだろう」と (M30.04) は語る。ただ、逆に彼女がもし女性用の性風俗に行くとしたら「それは浮気だと思わないけれど、バカヤロウと思う」。加えて、彼にとって、性風俗産業以外に、「セフレ<sup>10</sup>」を持つことも浮気としては入らないと述べる。女性のインフォーマントの中でも、彼氏や夫には普通の女性と性的な関係を持つよりも、風俗に行きたくて欲しいと言う人もいた (F20.07), (F20.04)。

#### 事例 I 37歳の男性 (M30.07)

##### 1) 1回目のインタビュー (2017年4月)

妻は妊娠中。

##### 2) 2回目のインタビュー (2017年8月)

子供が生まれて二ヶ月。

##### 1回目のインタビュー

ここでは、37歳の男性 (M30.07) の事例を取り上げる。

---

<sup>10</sup> セックス・フレンドの省略。

妻との交際期間は6年で、結婚歴は3年となる<sup>11</sup>。彼にとって、セックスの意味は「愛情を確かめるもの」と「解放」である。セックスは「自分がリフレッシュする」時間であり、自由になれる時間でもある。「例えば、洋服を身にまとって、このような立場じゃないといけないとか。仕事をしているとスーツを着て、要は仕事の格好をしましょう。時計にしても、靴にしても。(…)逆にそういう行為の時は全部もう裸になるし、基本的に。自分の素が一番出る時間帯だと思う。自分らしい時間だよ」と述べている。セックス自体にも「関心度が高く」、セックスの重要度は「どちらかといえば重要」であると述べている。しかし、彼のケースでは、結婚前後と出産前後で性意識が変化していった。以下にその変化について分析する。

妻と結婚する以前、セックスは「普通に愛を確かめ合うセックスだった」が、結婚してからセックスは「子供を作ることが目的でした」と言う。結婚を経て子供が欲しいと言う願望が高ったため、「妻が焦り出し」、排卵日の時にしかセックスをしなくなった。彼にとって、セックスという意味は「愛情を確かめるため」と「解放」であるが、結婚をしてからセックスで彼が理想とする解放を感じられなくなり、セックスの目的が「子供を作るため」と変化し、彼にとっては大きなプレッシャーになってしまい、妻とセックスをする時には「逆に気分が沈む」と述べている。インフォーマントは次のように語った。「セックスをする目的が変わってくると、もう疲れているけれど、もうこの日じゃないと嫌だってなったら、じゃ、変な話、もう出せばいいんでしょう、っていう感覚にもなりますよね。もう本当にそういう状態だったし。すごく疲れて帰ってきているのに、どうしても「お願いします」と頭を下げられるわけです。向こうも焦っているからね。そこまでやられてもう「嫌です」とは言えない。だから辛かろうが、しんどかろうが、もうサクッと終わらせる」。

結婚後、妻とのセックスは子供を作るための行為となり、プレッシャーを感じ、セックスが「嫌になった」と言った。そのため、妻には「母親」でいてほしいという願いを述べた。

そこで、「本来のセックスに対する満足感が得られない」、「単純にセックスを楽しみたい」と言う理由でインフォーマントは婚姻以外の領域でセックスを求めるようになり、妻が妊娠する前にある女性と一回限りの性的な関係を持った。

彼は次のように述べた。「もうお母さんでいてください。それは別に構わない。でも僕は僕の人生もあるから、多少はエンジョイしないと。逆に息苦しくなる。家庭でもいい自分でいられない、リフレッシュしていないんだから、全部ハッピーな自分で「ただいま！」って言って帰ってくるのか、それは浮気していいよがなんだろうが。そこで変に「いや、浮気はダメだから」って我慢するのか。「うー」てなって「ただいま…」で帰ってくるのか。それ（浮気はダメだという法律）は国が決めたことでしょう。ここだけの話。そんな個人の人生は個人である程度決める権利がある。それはそれで楽しくやればいい」。

妻が妊娠してからも、インフォーマントは妻とのセックスを「子作りの延長線上」としてしか認

---

<sup>11</sup> インタビューを行った時にはまだ妻は妊娠中であったが、2017年の7月に出産した。

識できなくなり、セックスに積極的になれず、意欲がなくなったと言う。ただ、妻から求められる時には彼女に従ってセックスをするが、妻とのセックスの流れがいつも同じであるため「正直に言うともう飽きた」と語った。

## 2回目のインタビュー

2017年8月にこの男性(M30.07)に2回目のインタビューを行い、出産後の様子を聞いてみた。

子供が生まれて二ヶ月となり、妻は里帰りしている。そのため、彼は久しぶりに自由に感じると述べている。新しい女性と出会うため、出会い系のアプリの利用も考えていると言う。もし、夫婦間のセックスをよりよくする方法があれば、互いに努力して二人だけの性を作り上げることは考えられるのかどうか聞くと、彼はそれは否定する。何故ならば、以前のインタビューで彼が述べていたように、彼女には「母親」でいてほしい。今から二人の性生活を作り上げて、そこに力を入れても「大変」であり、家に帰ってまで何か努力をしたくないと言う。家庭は家庭で、性的な快楽は求めるのであれば、外で求めると言う。

以上のように、結婚と出産を経て、(M30.07)の性意識がどのように変化しきているのかが見られる。彼にとって、もともと性というのは「愛情を確かめる」行為、「解放」と結びつくものであった。しかし、結婚してからはお互いに子供願望があった。しかも、彼よりも、妻の方がその願望は強かったため、セックスは子供を作るための行為が中心となり、本来のセックスの意味が完全に排除されるようになった。

夫婦で子供を作ることが目的となったと同時に性意識も変化した。インフォーマントはセックスを通じてリフレッシュしたい、自由になれる時間を味わいたいが、出産前のセックスは「義務」と強く繋がっているため、「辛い」と語る。妻とのセックスは「したい行為」よりも「しないといけない」行為となり、2人の愛情を確かめ、解放を感じるよりも「サクッと終わらせたい」と言う願望が強い。

セックスは完全に子作りの性になり、妻との関係の中では性的な満足を得られない。それだけではなく、妻とのセックスは「いつも同じ」、「流れがわかる」ため、マンネリ化し、「飽き」を感じていると彼は述べる。妻には母でいてほしいと語っている。つまり、彼女にはセックスを求めずに、家庭外の領域で彼が望んでいる性を味わいたいと考えている。

亀山の『妻とはできない』こと』(2003)と、『妻と恋人』(2011)でもインフォーマントが語るように、出産を経て、妻を完全に母親として認識するケースは多い。例えば、ある男性は、妻は子供ができてから、夫との関係よりも、子育てに重みをおいていると言う。そのため、妻に対して、性的な快楽を感じないため、妻が夜になってセックスを求める前に寝たふりをしたり、わざと遅く帰ることもあると語っている。一方、この男性は妻以外の既婚女性と性的な関係を持ち、女性に包み込まれるような幸福感は初めて感じたと述べている(亀山 2011: 18-19)。

このようなケースを見ると、妻との性的な満足感は得られないことについて、互いに話合った

り、工夫することはしない。(M30.07)のように、家庭は家庭で安心できる場所であってほしいと望んでいる。セックスは家庭の外に存在するものであり、それぞれの領域を分けるようにしていることが見られる。自分がもともと持っているセックスの意味を維持することが困難であり、「家に帰ったらもう何も考えたくない。無理して妻を自分の方向に持って行くよりも<sup>12</sup>、外で同じ仲間を探す方が早い<sup>13</sup>」と言うことで、夫婦間の性を意識的に育てない傾向も見られる。

## 事例Ⅱ 28歳の男性 (M20.11)

(M20.11)は2013年に一度インタビューし、2017年に2回目にインタビューを行ったため、この4年間で性意識がどのように変化したのかが明確にみられる。

### 1) 1回目のインタビューの時は28歳 (2013年)

結婚歴1年

### 2) 2回目のインタビューの時は32歳 (2017年)

2016年に離婚

#### 1回目のインタビュー

1回目のインタビューの時、彼は28歳で、結婚して一年目であった。結婚する前に彼女と一年間同棲経験がある。彼にとって、セックスの意味は「快樂」であり、セックスへの関心度や、重要度は非常に高い。セックスは不可欠な行為であると考えている。

ただ、彼は結婚後、「相手を家族としてみるからセックスができない」、「愛情を持つとセックスができない」ためセックスレス状態で悩んでいる。その様子を以下のように述べた。

「(…)今は結婚していても、まったく(セックスが)ないんですよ。(…)僕の場合はこう愛情を持つとできなくなってしまうんです。不思議なんですけど。自分じゃ、本当にどうすることもできないんで、なんとかトライしようとするんですけど、うまくいかない。それで、向こうが不満で。(…)普段は仲がよくて、一緒に出かけたりとか、話も合うし、何にも問題がないんですけど、その部分(セックス)に関しては、問題です。だから、『家族』って言うふうに考えちゃうと、なんか性的な欲求って僕の場合、家族に向かない。やっぱり外部のほうに向いてしまって。でも妻を愛していますし、妻以外と例えば離婚して結婚したいとかも思わない。(…)どうしてもこの性的な欲求だけが妻に向かない」。

さらに、セックスという行為そのものに対して「どっちかっていうと汚いものっていうふうな印象があるんですよ。やはり、どうしても動物的な行為というか、あんまりこう、行為自体は非現実的で、それに対してなんていうか、こう愛情を持っている人に対してその汚い行為をするっていう、たぶんそれが嫌なんだろう」と彼は語った。しかし、同棲する以前に「多少は性生活」はあ

<sup>12</sup> ここでは、性的な価値を意味する。

<sup>13</sup> 例えば、人間は、ご飯を食べる仲間、サーフィンが好きであればサーフィン仲間がいる。セックスもそうで、セックスが好きであれば、セックスをする仲間を探せばいいし、割り切るのが楽であると彼は語った。

った。しかし、同棲したとたんセックスをしなくなった。妻は彼とのセックスを求めるが、「もう義務みたいになって、あまり言うからしょうがなくしようとするけれども、結局駄目。こっちが全然だめ。立たないので。うまくいかないですよ」と言う。彼の場合、この状況を変えたいと言う願望はあるが、どのように改善すればいいかわからない。「僕もそれをなんとかしたいという気持ちはあるんですけど。どうにもできなくて。だから本当に最近、バイアグラとかちょっと考えているんですね」。

興味深いのは、この男性は、妻以外の女性とは性的な関係が持てることである<sup>14</sup>。彼は、妻とのセックスはできないが、妻と結婚する以前から一回限りの女性や、数回会った女性とはセックスの関係がある。妻以外の異性とは恋愛目的ではなく、性的な快楽がメインである。結婚してからも婚外セックスに至ることが少なくないと述べた。妻とのセックスは、彼の望むセックスではなく、妻のセックス行動に合わせる傾向が強いため、彼自身の欲求を満たそうとは思っていない。しかし、婚外セックスの場合、彼の欲求を満たすことが中心にあり、妻と感じられないエロスを味わえると彼は言う。

## 2 回目のインタビュー

2 回目のインタビューでは、男性 (M20.11) は既に離婚していた。離婚の原因は夫婦間のセックスレスである。1 回目のインタビューでは、彼は妻とのセックスレスで悩んでいたため、インタビューの内容もこのテーマが中心であった。2 回目のインタビューでは、その当時、彼は性についてどのように思っていたのかを中心に語ってもらった。

彼は結婚中、家庭は家庭で、性的な快楽を満たすのは家庭外だと思っていた。しかし、「やっぱり性的な欲求をある程度こう感じさせるような相手じゃないと結婚生活はやっぱりうまくいきませんね。それは僕、離婚してからわかりましたね。なんかその一緒にいて楽しいとか、話があうとか、価値観を共有できるとか、建前はそうなんですけど、やっぱり性的なものが多少ないとダメですね」と述べた。

加えて、結婚当時の婚外セックスについても一度語ってもらった。彼によると、互いの家庭に迷惑がかからないなら性的な関係を持つのは構わないと言う。そのため、異性と連絡を取っても、例えばメールはすぐに消すようにしていた。婚外セックスの相手は既婚女性と未婚女性であり、複数の女性と性的な関係を持っていた。離婚後にも性的な関係を持つ女性はいる。

男性 (M20.11) は、1 回目のインタビューでは、セックスは「汚いもの」、愛情持つ妻とはセックスができなくなる、と語っていたが、今回のインタビューでは、妻とのセックスは義務意識に近かったと彼は言う。「義務がやっぱり強いじゃないですか。特にその義父母とか自分の両親も含め

---

<sup>14</sup> 阿部は、妻とはセックスができないが、妻以外の女性と性的な関係を持てる (妻だけ ED [勃起障害]) ことについて心因型疾患 (阿部 2004 : 78-82) と述べ、ストレスや相手とのセックスについて抵抗を感じるなどの場合に生じる。

て、そのセックスをある意味強要されるっていうのが僕にはものすごく心地悪かったですよね。要するに「子供はまだなの」とか、「仲良くやっているの」みたいな、なんかその性的なものに対して、こうタブーとされているものだからこそ欲情するところがあるのに、それがオープンになってどうもなんか楽しめない」。

結婚後、妻とのセックスは完全に「子供を作るための行為」ととらえるようになり、互いの性的な快楽を満ちし、二人で満足する性生活を築くことはできなかった。婚外セックスの場合、身体的な触れ合いが多く、性に関するコミュニケーションも楽しめる一方、妻とは性に対するコミュニケーションを避けていたと彼は言う<sup>15</sup>。

以上のように、(M20.11)の事例を述べた。まず、彼にとって、本来のセックスは「快楽」であるが、愛情を抱くと（この場合は妻）セックスができなくなると言う。セックスレス状態に関して妻からの不満を感じるとともに、セックスについての義務感も強くなる。さらに、2回目のインタビューでは、「愛情を抱くとセックスができない」というよりも、子作りに対する親達からのプレッシャーが強いため、「快楽を味わう」セックスが、「子供を作るため」のセックスに意識が変わり、義務感を感じていたことがわかった。このようなプレッシャーを感じたくないため、快楽を感じるセックスは夫婦外で経験するようにしている。妻とのセックスができなくなり「ED状態」が続いたが、妻以外とのセックスだと普通にセックスと女性との2人の空間を楽しめる。

セックスが子供を作るための行為（義務）になってしまうと、性的なコミュニケーションと身体的な触れ合いも少なくなるか、完全になくなる。一方、婚外セックスは快楽中心であるため、相手の性的な好みにも関心が高く、コミュニケーションも多く取り、身体的触れ合いを味わう傾向が見られる。

### 事例Ⅲ 42歳の女性 (F40.03)

彼女はインタビュー当時42歳で、23歳で結婚し（結婚歴は19年）、2016年から「離婚」<sup>16</sup>という形で夫とは別居である。彼女は子供2人（17歳と18歳）と住んでいる。

#### 1) 1回目のインタビュー（2017年5月）

夫婦間のセックスレス現象を中心に語る。

#### 2) 2回目のインタビュー（2017年8月）

夫以外の男性とのセックスを中心に語る。

<sup>15</sup> 1回目のインタビューでは、夫婦間のセックスレスを解消したいため、2人で工夫もした時期があったと彼は語る。例えば、セックスについて二人で話し合うこともあると述べている。しかし、彼は妻の性的な好みや願望を知っているが、妻には彼の願望や、彼がどのようなセックスが好きなのかは伝えてないことが興味深い。関係性が長くなればなるほど、徐々に妻との性についてのコミュニケーションは減った。

<sup>16</sup> 正式には税金の関係で籍は残っているが、夫とは別居中であり「離婚したのと一緒」と彼女は述べている。



## 1回目のインタビュー

彼女にとってセックスは「コミュニケーションでもあるし、普通に言葉でコミュニケーション取るだけじゃ足りないものを補う」ものである。「あとやっぱり自分が相手から女性として見られているっていうことを実感することができる大事なツール」であり、セックスは「愛情表現でもある。相手のことが好きという表現でもあるし、自分も愛されているということが実感できる」と語った。

一回目のインタビューでは、(F40.03)は夫との性生活、つまり、セックスレスであったことを中心に語る。夫とは、10年前に少しずつセックスが減ってきたという。一人目の子供が生まれた後に徐々にセックスが減ったが、二人目の子供を妊娠中にも多少の性生活はあった。ただ、二人目の子供が生まれてから夫とはセックスレスとなった。夫をセックスに誘っても「疲れている」と拒否されるようになり、27、28歳の頃(2002年)には結構悩んでいたという(ここで悩みというのは夫から性的に拒否されることと、夫とのセックスにおける言語的コミュニケーションがうまくできないことを意味する)。夫からセックスを拒否されることが自信喪失のきっかけとなり、「そのままもうなんか女として終わるのかな」と夫に問いかけた。「彼と話し合っただけ、『このままもうそういうことをしたくないならしたくないで言うてくれれば、私もじゃ、あなたがそうだったら、私自身がどうするのかを考えるから言うて欲しい』と言ったら、『そういうことじゃないんだよ』と彼は答えた。『したくないわけではないんだよ。ただ疲れているんだよ』と言うの。でも多分その時は今思えば浮気していたんだろうね、向こうは。でも子供は小さいし、別れることもできないし、どうしようかなってずっと悩んでいた」。

夫の浮気を想定していた理由として、インフォーマント自身も一年半前(2005年)から夫以外の男性と不倫していたため、夫の行動パターンの変化がわかったと言う(例えば、仕事の後に飲み会に行くと言ったが、夫は酒の匂いが全くしないなど)。

## 2回目のインタビュー

2回目のインタビューでは、夫と夫以外の男性とのセックスについて述べている。

現在の彼氏とのセックスは「情熱」であると表現する。相手は愛情表現も豊かで、「外のデートでキスとハグもする」。一方、夫とは「20年つきあっていると『愛している』とか『好き』とかを言わない」が、彼女はそれを望んでいる。一方、不倫相手とは毎晩電話し、互いに好きであるというメッセージのやり取りをしている。また、夫と性生活がまだあった時、セックスの「流れがわかってくるでしょう。次こうで、こうで。たまには、なんかちょっと違うようなこともしたいんだけど、ちょっと違うんだよね。あと毎回そんなに変わったことをしようという気持ちがないんだと思う。「好き」という気持ちはあっても、なんか作業ではないんだけど、ま、普通に『はい、こうして、こうして。はい、終わる』、夫とのセックスはただの「ただの欲求処理」、「夫婦ですべき行為」であった。

彼女（F40.03）の場合、不倫を経験する前は「不倫は絶対ダメ」な行為であり、「私もされることがあったから、すごく嫌だったし、最低だ」と考えていたが、「ただ今今は、結局、浮気ってする方だけが悪いんじゃないくて、される方も原因があるところちょっと思う」と語る。彼女によると、夫が浮気する前に女磨きをするべきであったと言う。つまり、もっと相手のことを「好き」ということを表す、愚痴を言わない、化粧をするなどの行動のことである。現在、彼氏がいるため、本やネットで女性磨きについてたくさん勉強し、以前の失敗を繰り返さないように努力をしている<sup>17</sup>。

以上の事例を見ると、彼女（F40.03）にとってセックスは「愛情表現」や「コミュニケーション」であるが、このような性的な意味を2人で育てるのではなく、夫とのセックスはマンネリ化してしまった。夫のセックスの「流れ」はいつも同じであるため、セックスはただの「欲求処理」になった。最終的に、夫にセックスを断られ、それがきっかけとなり拒否されることと、互いのコミュニケーションがうまく進まないことに悩んでいた。（F40.03）は、セックスレスになったのはマンネリ化だけではなく、2人目の子供が生まれてから、彼女は妻・女性よりも、母親としての意識が高まり、夫よりも子育てに夢中であったことと考えている。夫とのセックスレスになってから彼女は女性としての存在価値を感じなくなり、婚外恋愛をすることによって、また女性としての意識が高まった。夫以外の男性とのセックスは愛情表現であり、「自分は相手から愛されている」、「自分は女である」と認識する行為でもある。

彼女のように、夫婦間でセックスレス状態が生じ、「心のどこかが寂しい」（亀山 2014：41）、夫が身体的触れ合いを避けるため、夫の「心は家庭にないんじゃないの」と述べ、夫婦間で得られない欲求を夫婦外で発揮する事例は少なくない（亀山 2013：68）。しかし、このインタビューでは、彼女が考えている「愛情表現」と「コミュニケーション」のセックスを夫婦間で育てるのがいかに困難であるのかが見えてくる。

3人のインフォーマントは異なるライフストーリーを持ち、夫婦間のセックスレスや、婚外セックス（婚外恋愛）に至るプロセスは異なる。しかし3人の共通性がある。3人のインフォーマントは、もともと持っていた自己のセクシャリティを夫婦間で育てられない、または育てることが困難であることが見られる。事例1（M30.07）では、セックスの意味は「愛情を確かめる行為」と「解放」である。事例2（M20.11）では、セックスは「快楽」の意味であり、事例3（F40.03）の場合、セックスは「コミュニケーション」と「愛情表現」である。

このように3人のインフォーマントは自己のセクシャリティについて述べているが、結婚や、出産を経て、性意識・性行動が変化し、セックスの意味が変わり、行動も変わってくる。（例えば、

---

<sup>17</sup> 2017年8月に（F40.03）と再会した時、付き合っている男性の妻が二人の関係に気づき、男性側からインフォーマントに別れを言い出したということである。

快楽や、愛情表現、コミュニケーションよりも、夫婦間のマンネリ化により、性欲処理が中心になる。また、出産を希望するため、セックスの意味は「愛情表現」や、「快楽」よりも、「子作り」に変化し、セックスへの義務意識が強くなるなど)。夫婦間ではもともと持っている自己のセクシャリティを発揮できず、性生活は夫婦外の領域に移動する傾向が見られる。そして、夫婦間と夫婦外で求めるセクシャリティも異なる。例えば事例3の(F40.03)は夫とのセックスレスになる前、セックスは欲求処理のためであったと語るが、不倫相手とはもともと彼女が持っているセクシャリティにおけるセックスの意味、つまり「コミュニケーション」と「愛情表現」を発揮できた。ところで、日本の場合、インフォーマントの性意識・性行動はライフイベントにより変化するし、夫婦内と夫婦外での性意識・性行動は異なることをみると、自己のセクシャリティは漠然とし、内面化されていないと言えるのではないか。もし、自己のセクシャリティがもっと明確で、肯定・内面化され、すなわち、自己のアイデンティティの重要な部分としてセクシャリティが組み込まれていれば、ライフイベントや、夫婦間の変化によって大きく変化しにくいのではないか。あるいは、家庭の状況の変化が生じて、互いコミュニケーションを取り、2人の性をどのように育てるのか、マンネリ化しない工夫ができるのではないか。だが、自己のセクシャリティが内面化されていないため、夫婦間で得られない性を別の領域で発揮するのだと考えられる。

## 6. 結論

本稿では、2010年以降からの婚外恋愛（不倫）における先行研究を取り上げた上で、インタビュー調査に基づき、インフォーマントは不倫をどう捉えているのかを、3人のインフォーマントの実態例により詳細に提示した。その目的は、夫婦間と夫婦外の性意識・性行動がどのように異なるのか、つまり、婚内と婚外の性意識・性行動の相違点を考察することにある。

先行研究によれば、夫婦間のセックスは、性的な快楽よりも義務感（夫婦であるからやるべきこと）で行われる傾向が強い。夫婦間のセックスの特徴として、次の点が挙げられている。即ち、「あっさり」、「オーソドックス」、「性欲処理」である。他方、婚外セックスは、快楽中心である。つまり、自己が望むセックスを味わい、エロチックさを体験するという特徴があり、男性だけでなく女性も性的な主体になっていることが見受けられる。筆者が行なったインタビュー調査でも、夫婦間と夫婦外のセックスが異なるという点に関しても同様である。先行研究とインタビュー結果を踏まえ、夫婦間と夫婦外の性意識・性行動に焦点を当てると、性は家庭と恋愛の二つの領域に分けられるのである。すなわち、夫婦間と夫婦外では性規範が異なり、セックスという同じ行動であってもセックスの意味が領域や相手によって大きく異なるのである。日本における夫婦関係では、男女の性的な満足よりも、夫婦としての役割を果たすことで「十分」であると捉えられているため、性的なコミュニケーションは排除され、セックスレスになる男女も少なくはない。インタビュー調査では、インフォーマントの中に、自己の性意識・性行動が十分に満たされていないため、不満を抱え、この問題をどのように解決すべきかがわからない事例も存在した。自分のセクシャリティを

重要視すると共に、夫婦間のセクシャリティを作り上げることは家庭内で困難であると考えているのである。こうした点から、夫婦間で満たすことができない身体的触れ合いや性的快楽の追求は、夫婦外で探すことへと繋がるのである。

また本稿においては、人間それぞれ自己の性的アイデンティティを持っているという定義(Lewandowski: 2008) がされているとはいえ、先行研究とインタビュー調査を見る限り、夫婦間のセックスへの意識や行動、自己のセクシャリティに関する意識が曖昧である。興味深いことに、西欧の場合、日本よりも、人々のアイデンティティの重要な部分としてセクシャリティが組み込まれている。具体的に言えば、結婚や出産のような大きなライフイベントが生じたとしても、もともと自分が抱えている性意識・性行動を夫婦間でも保つことが重要視されている。仮に、夫婦間で自分のセクシャリティを発揮できなくなると、何をどのようにすれば夫婦間での性的関係が修復され、改善できるのかといった点に焦点が当てられる。しかし、日本の場合、夫婦間のセックスはアイデンティティとセクシャリティの結びつきが弱く、セクシャリティと生殖の方が強く結びついている。そこで、結婚後や出産後(またはライフイベントが生じると)セックスレスになりやすい傾向にあると言える。一方、婚外セックスは生殖との結びつきが極めて弱く、快楽中心的であるため、自己のセクシャリティを見つけ出し、それを発揮することができる。

セクシャリティは社会や文化により構築されるものである(Gagnon & Simon: 2005)。そのため、日本のセクシャリティは日本の文化や社会の影響を受ける一方、西欧の文化を完全に受け入れることはできず、またその必要性もないと思われる。しかし、インフォーマントの中には、夫婦間で自己のセクシャリティをより発揮し、互いの性生活を育てたいとの欲求はあるものの、その方法が分からず、不満を抱えてセックスレスに至る者も存在する。したがって、日本人が漠然と持っている自己のセクシャリティについてより深く考え、内面化させ、性生活に反映させていくことが重要ではないかと考えられる。最後に、不倫をより深く理解するために今後の課題を以下に述べよう。①男女関係のあり方だけではなく、仕事・経済と不倫の因果関係を考察すること、②性風俗産業を利用する人と、利用せずに婚外恋愛に至る人を分けるファクターを明らかにすること、③西欧で行なわれているアイデンティティとセクシャリティの結びつきに関する議論を詳細に検討し、日本との相違点を考察すること。その上で夫婦間の性生活で不満を抱えている男女に、日本人にとって適切な改善方法を考えることである。

#### 参考文献

- (1) 阿部輝夫、『セックスレスの精神医学』筑摩書房、2004.
- (2) 荒木乳根子『配偶者間のセックスレス化—2012年調査で際立った特徴—』日本性科学会雑誌、第32巻：7-21、2014.
- (3) 秋山謙一郎『友達以上、不倫未満』朝日新書、2017.
- (4) 有川ひろみ『不倫の恋も恋は恋』幻冬舎、2004.
- (5) 有川ひろみ『不倫幸福論』幻冬舎、2007.

- (6) Gagnon, J. & William, S, *Sexual Conduct: The Social Sources of Human Sexuality Second Edition*, US: Routledge, 2005.
- (7) 長谷川裕雅『不倫の教科書-既婚男女の危機管理術』イース・トプレス, 2017.
- (8) 久田恵『欲望する女たち-女性誌最前線に行く』文藝春秋, 51-631, 1998.
- (9) 堀口卓夫『単身者の性に関する考え方と規範意識-2003年調査と2012年調査より』日本性科学会雑誌, 第32巻: 22-31, 2014.
- (10) 亀山早苗『「妻とはできない」こと』WAVE 文庫, 2003.
- (11) -『不倫の恋で苦しむ男たち』新潮文庫, 2006.
- (12) -『「夫とはできない」こと』WAVE 文庫, 2010.
- (13) -『女の残り時間-ときめきは突然, やってくる』中公文庫, 2010.
- (14) -『夫と女…セックスをめぐる五つの心理』中公文庫, 2011.
- (15) -『妻と恋人。おぼれる男たちの物語』中公文庫, 2011.
- (16) 亀山, 山路, 『おとなの関係』中央公論新社, 2012.
- (17) 亀山早苗『恋が終わって家庭に帰るとき』, WAVE 出版, 2013.
- (18) -『人はなぜ不倫をするのか』SB 新書, 2016.
- (19) Karl Lenz, *Soziologie der Zweierbeziehung, Eine Einführung*, Zweite Auflage, Deutschland: Springer Fachmedien Wiesbaden GmbH, 2003, 217.
- (20) 松岡宏行『できる男は不倫する』幻冬舎, 2015.
- (21) Peter-Paul Bänziger, Magdalena Beljan, Franz X. Eder, Pascal Eitler (Hg.), *Sexuelle Revolution? Zur Geschichte der Sexualität im deutschsprachigen Raum seit den 1960er Jahren*, Transcript Verlag Bielefeld, 15, 2015.
- (22) Sydow, *Sexualität in Paarbeziehungen*, Deutschland; Hogrefe Verlag, 1, 2015.
- (23) 山田昌弘, 白河桃子『「婚活」時代』ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2008.
- (24) 露木幸彦『みんなの不倫～お値段は4493万円!』宝島 SUGOI 文庫, 2012.
- (25) 露木幸彦『イマドキの不倫事情と離婚』祥伝社黄金文庫, 2014.